

## 事例3 神奈川県立相模原総合高校

### DATA

- 学 科：単位制総合学科
- 創 立：1980年  
(2003年校名変更・学科改編)
- 生徒数：717人  
(男子323人・女子394人)
- 進路状況(2007年度実績)  
大学 33.1% 短大 10.6%  
専門学校 31.4%・就職 14.4%  
浪人 5.1% 未定 5.5%



# 体験重視型キャリア教育で 生徒一人ひとりをきめ細かく支援

### 多様な進路に対応する総合学科の新設校

神奈川県立相模原総合高校は、03年に普通科の大沢高校を改編して生まれた、県内2校目の総合学科<sup>\*1</sup>の高校だ。総合学科は、現在の高校生の能力・適性、興味・関心、進路等の多様化に対応するためにつくられた、普通科と専門学科に並ぶ第3の学科。原則単位制で、必修科目とともに学校独自の多彩な選択科目をもつ(図1)。自己の興味・関心や進路希望を軸に個別の履修計画を立てて学ぶ方式で、生徒は入学時から自分自身と将来を見つめて随時選択していくことが求められる。

そのような特色をもつ総合学科への改編にあたり同校が目指したのは、キャリア教育を基盤として「生きる力」「学ぶ力」「自律し自立する力」を育成する学校づくりだ(図2)。学習指導や特別活動などすべての教育活動を社会との接続を意識して見直し、独自のスタイルを構築してきた。

現在、「課題集中校」と言われた前身校から、生徒の状況は大きく変わってきている。同校の羽中田圭子校長は「目的意識をもち、授業や特別活動に自分から積極的に関わろうとする生徒が増えた」というが、それは数字にも表れている。かつては3年間での退学者数が70人を超す学年もあったが、昨年度はわずか2人。卒業生の進路状況で注目した

いのは進路未定のまま卒業する者の割合だ。03年度16%が07年度11%に減少し、進学準備を除いた未定者は改編以来3年連続で6%以下を維持している。また、普通科時代は就職者が半数を占めていたが、同校入学者の変化もあって大学進学者が大きく増加し、現在は専門学校も含めて上級学校への進学者の割合は7割を越す。このような変化をもたらした、同校の取り組み内容について見ていきたい。



羽中田圭子校長

### 校外での体験を重視した3年間のプログラム

同校のキャリア教育の中心となっているのは、総合学科の原則履修科目「産業社会と人間(産社)」<sup>\*2</sup>および「総合的な学習の時間(総合学習)」だ。1年次は「自己理解を深め目標を明確にしよう」、2年次は「将来設計を定め学力、自己を伸ばそう」、3年次は「自己実現に向けチャレンジしよう」という学年目標に沿い、3年間の積み上げ型のプログラムを構築している(図3)。

1年次に履修する「産社」は、2年次以降の科目選択や将来設計の基礎づくりと位置づけられ、適性検査やキャリアプラン作成などによる自己理解、上級学校・企業見学などの

図1 学校独自に設定する総合選択科目の例

系列	科目
人文社会系列	文学研究近現代編、漢字研究、心理学入門、茶華道入門、マーケティング
生活福祉系列	児童文化、食文化、ミュージックセラピー、社会福祉基礎、基礎看護、服飾文化
環境数理系列	代数学入門、発展化学、発展生物、生活科学、環境野外実習A・B集中講座
国際文化系列	生活英語、フランス語、中国語、ハンゲル、異文化コミュニケーション、国際文化比較
情報ネットワーク系列	HP作成入門、デジタル映像編集入門、初めてのCG、CAD入門、ハードウェア構成技術
健康スポーツ系列	スポーツ探求A・B、レクリエーションスポーツ、スポーツトレーナー学

※異なる系列の科目も選択可能

校外学習を通じた上級学校理解、職業理解などに取り組む。積極的に社会参加するための能力・態度を養成するために政治経済・金融やモラル・マナー等を学ぶ、シチズンシップ教育も取り入れられている。

3年間にわたる「総合学習」では、まず1年次に「ものの見方・考え方」「読む・聞く・書く・話す」等を身につけるテーマ学習を実施。基礎学力の定着は、受験だけでなく卒業後の進路先に適応するためにも大切な要素であるという考えに基づいている。

2年次になると興味・関心や希望進路のフィールド別に10人前後のグループを編成し、チューターと呼ばれる担当教員の指導のもとで進路研究を進める。フィールド別の上級学校・企業見学のほか、夏季休業にはインターンシップも行われる。

そして3年次も同様にフィールドに分かれ、個人の課題研究に取り組む。興味・関心や希望進路に関連して、例えば「子どもの栄養を考えたおやつ」「動物が人に与える影響」「航空整備士になるまで」といったテーマを各自で設定。博物館や図書館といった関連施設も活

用しながら探究を深め、レポートや作品を制作する。いわば卒業論文や卒業制作のような活動だ。

こうしたプログラムで特に重視されているのが、校外における“体験”である。前述のように3年間を通じて、実際に企業や上級学校の現場を訪問したり、社会人と触れ合う機会が多く設定されている。

「現代の子どもたちには社会での実体験や社会のなかの自分を意識する機会が絶対的に不足しているなか、体験活動は自己の興味・関心の発見や進路意識の高揚に大きく役

図2 学校経営の基本的な考え方と取組み

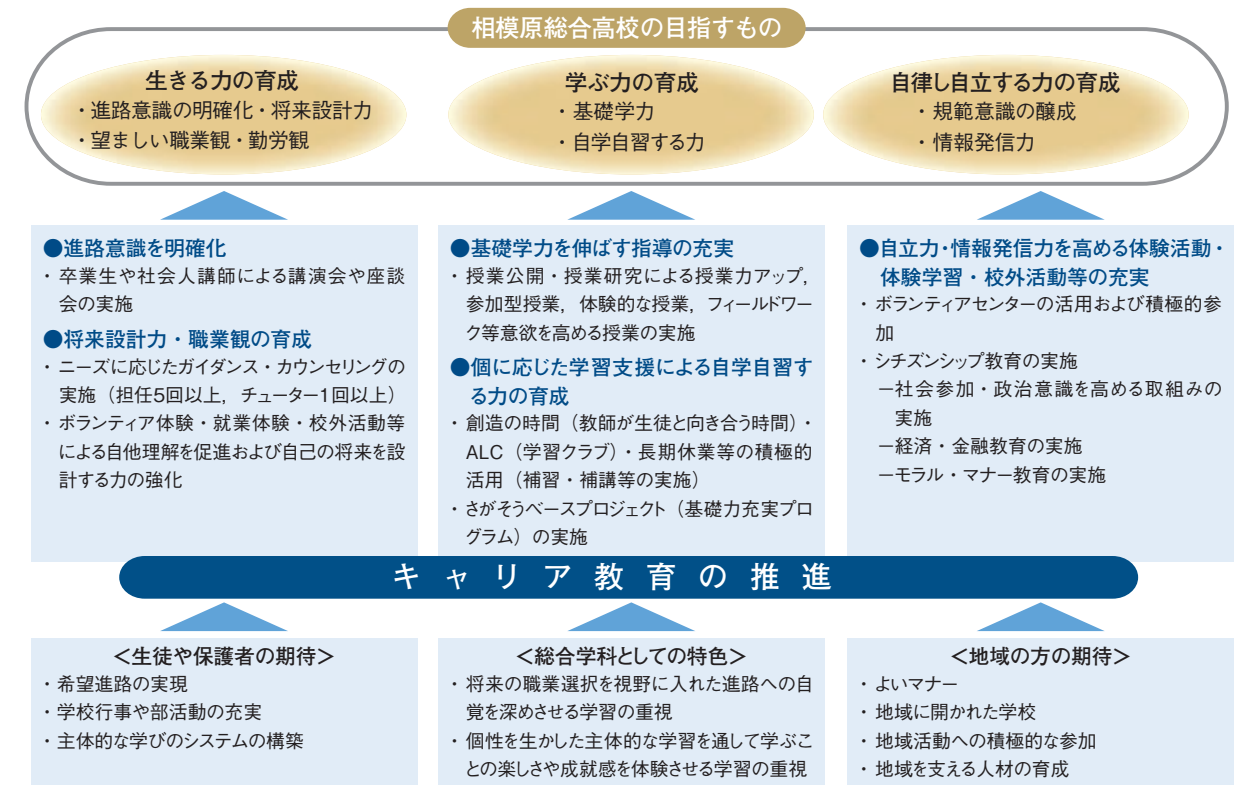


図3 「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」の概要(08年度)

1年次	<b>「総合学習ベースプロジェクト」</b> ・読解力の育成 ・2年次の準備学習 ・2年次の所属フィールド決定のためのプログラム など [夏休み] 夏期講座	<b>「産業社会と人間」</b> ・学校適応、自己理解 ・上級学校理解(学校見学会含む) ・職業理解(企業見学会含む) ・産業社会理解 ・キャリアプラン作成 など [夏休み] 職業人インタビュー、オープンキャンパス、学校見学、インターンシップ、ボランティア活動
2年次	<b>「総合学習キャリアプロジェクト」</b> ※フィールド単位 ・2回の校外学習(上級学校、企業等見学)を軸にした進路研究 ・3年次の「課題研究」のテーマ設定 [夏休み] オープンキャンパス、学校見学、インターンシップ、ボランティア活動	
3年次	前期:「総合学習フリープロジェクト」 ※フィールド単位 ・課題研究(調査、実験、作品製作など) [夏休み] オープンキャンパス、会社訪問・就職対策講座など 後期:「NEXT STAGE PROGRAM」 ・進路内定者への入学前・入社前プログラム ・進路未定者への活動継続プログラム	

立ちます。その重要性について教員全体で共通認識をもち、事前・事後の指導も充実させて効果を高めています」(羽中田校長)

### 授業や特別活動でもキャリア教育

キャリア教育の視点は、「産社」「総合学習」以外の各科目の授業においても取り入れられている。単なる知識の伝達ではなく、知識の応用力や社会で求められる諸能力の育成を目指し、グループワークやペアワーク、レポート作成やプレゼンテーションなど、情報の活用やコミュニケーションの要素を積極的に導入。各種コンテストへの挑戦、近隣の小学校やハローワークなどの地域の各種機関と連携した授業を行うことで学習意欲向上につなげるなどの工夫が少しずつ増えている。

しかし、教科・科目によっては取り入れるのが難しく、慣れ親しんだ指導方法を転換するハードルは高い。授業改善を促進するため、情報活用能力や人間関係能力など育成したい能力やその育成のための具体策を教科・科目ごとに例示した表を作成して共有するなど、教員研修が実施されている。また、授業は日常から他の教員に対してオープンだというのが、そうした動きをさらに加速させようと年2回程度の「授業公開週間」を設定し、担当教科・科目に関係なく他の教員の授業の見学が行われる。

「例えば褒め方にも、よい点数を取って頑張ったねと言う方法もあれば、自分で設定した目標を達成したら自分で自

分を褒めるという方法も。多様な意欲・関心の引き出し方を学び合えたらと思って実施しています」(羽中田校長)

授業以外の特別活動も活発で、そこでも地域や他の教育機関と連携した体験の機会が多い。例えば、「ボランティアは他者理解、社会貢献の重要性、社会的なマナーなどを学ぶことができる」(羽中田校長)と、今春から校内に「さがそうボランティアセンター」を設置。生徒のスタッフが中心となって地域の福祉・医療施設に企画提案を行い、全校生徒が誰でもボランティア参加できる体制を整えた。35時間の活動につき1単位の単位認定もある。また、近隣の大学や専門学校と提携して夏季休業中に授業を受講できるなど、高大・高専各連携の例も少なくない。

### 2人の担任とチューターが多面的に指導

毎年次、幅広い選択肢から進路と関連させた各自の履修計画を作成する総合学科では、履修・進路に関するガイダンス・カウンセリングが重視されており、同校でも手厚いサポートを組織的に行っている。

まず、ガイダンス機能については、年次による温度差や対応の違いをなくし、学校全体で情報やノウハウを蓄積していくことを目指し、進学・就職指導を担当する「ガイダンスセンター」が主導している。同センターが情報の収集、集積、提供を行い、進路ガイダンスや保護者対象の進路セミナーおよび運営センターが担当する履修ガイダンス等も含めて計画的に開催する。

個に対するカウンセリング機能の充実のためには、一般的な各クラス担任1人に副担任という体制から、2人担任体制へ変更。同校在任期間が長い教員と短い教員、理系教科担当と文系教科担当という具合に、タイプの異なる教員がチームを組んで多様な生徒に対応している。さらに副担任も各年次複数において担任をフォロー。2年次からの「総合学習」におけるチューターも、その分野における具体的な情報提供やアドバイスを行う。生徒一人ひとりの情報をなるべく大勢の教員で共有し、網を張るように連携して生徒をサポートしているのだ。

「生徒のキャリア発達のスピードや目指す方向は一人ひとり異なります。複数の教員が多面的に生徒を見ることで、様々な活動による生徒の変化や気づきがあった瞬間を見落とさないようにしたいのです。タイミングを逃さず支援

することで、生徒は飛躍的に伸びていきますから」(羽中田校長)

履修・進路相談の機会には面談週間が年5～6回あり、状況に応じて保護者も交えながら、こまめに生徒の状況把握と意思確認が図られている。また、放課後の約1時間を使って教員は会議等を入れず生徒と向き合う『創造の時間』が週4日設定されており、日常的にも進路や学習などの相談が気軽にできる体制を整えている。教員側から働きかけるだけでなく、生徒自ら担任やチューター以外の教員にも相談に行くなど、自主的な行動を促す方針だ。

多忙な指導現場にあって、同校教員が最優先しているのは生徒とコミュニケーションする時間だ。そこに十分な時間をかけられるよう、組織や運営方法の改革にも取り組んできた。一般的に学校組織では教員のコンセンサスをとりながら物事を推進することの困難や、一部の教員に役割が集中しがちといった課題が聞かれるが、同校では教員一人ひとりが主体的に動きスピード感ある組織運営が図られている。

具体的には、従来の校務分掌を抜本的に見直し、センター制を導入(図4)。6つのセンターがそれぞれ課題や目標をもって自律的に活動している。教員はいずれかのセンターに所属し、各センター20～30ある個別業務について2～3人ずつの係となって企画・調整を行う。係は担当業務の責任者として、若手にも権限が委譲されている。各業務は事後アンケート等でしっかりと振り返りがなされて翌年に引き継がれるなど、PDCA(Plan・Do・Check・Act)サイクルに則って進めることで業務効率化を図っている。

### 社会への接続に向けた上級学校の教育に期待

「社会の変化に伴って学校も変わらなくてはならない」(羽中田校長)と、改編をきっかけとして始まった学校改革は現在も続いている。今後の課題について、羽中田校長は次のように語った。

「本校では数多くの体験活動を実施していますが、これらが単発の“イベント”で終わってはいけません。体験によって生まれた意欲や進路意識を、いかに普段の授業や学習につなげていくかが大切です。例えば外国人に対するボランティア活動で日本の歴史や文化の知識習得を盛り込むというように、体験活動を教科学習と接続させる。一方、各教科・

図4 校内組織と主な役割

学習センター	・授業研究・改善(シラバス、授業評価など) ・行事関係 ・総合学科研究(産社、総合学習のプログラムなど) ・シチズンシップ教育等
連携センター	・学校外学修(高大連携、就業体験活動など) ・地域連携(福祉ボランティア活動など) ・PTA関係・保護者連携
ガイダンスセンター	・キャリア教育の企画全般 ・進学指導全般(模擬試験、小論文・面接指導など) ・就職指導全般(就職対策講座、求人票整理など) ・外務関連(進路指導協議会など) ・ガイダンス室、カウンセリング室
生活センター	・施設管理運営(自学習空間の整備など) ・保健管理運営(カウンセリングも含む) ・生徒会・委員会指導 ・生活指導・支援
運営センター	・学務・学籍管理 ・教育課程編成と運用(時間割、履修計画など) ・財務関係
入試広報センター	・入学者選抜の企画 ・中学広報活動・学校説明会等 ・情報管理 ・情報発信(HP運営など)

※教員はいずれかのセンターに所属

科目においてはキャリア発達との関連を明確にして改善を図っていくカリキュラム・マネジメント(教育課程経営)を推進し、より効果的な学びを提供していきたいと思っています」

3年間できめ細やかな指導を行う同校だからこそ、卒業生が学ぶ大学・短大や専門学校に対する期待も大きい。

「最も気になるのが、そこでどのように育ててもらえるのか、そしてしっかりと社会と接続させてもらえるのか。飾ったキャッチフレーズではなく、明確なアドミッションポリシーとわかりやすく正確な学校の情報が知りたいのです。大学進学率が5割を超えた現在、専門学校はもちろん、大学も社会で生きる力をつける教育機関として私たちは見えています。変化の激しい現代社会では、知識やスキルを身につけるだけでなく、それらを応用力や学び続ける力、また社会貢献意識等の育成が求められています。高校側もさらに改善していかななくてはなりません、そのような観点をもつ大学・短大や専門学校で卒業生がいつそう伸びていくことを願っています」

(藤崎雅子 ライター)

※1 普通教育および専門教育の選択履修を旨として総合的に施す学科として平成6年度から制度化。原則として単位制で、多様な選択科目からの履修、キャリア教育を重視していることなどが教育の特色。  
 ※2 総合学科で原則全ての1年生が履修。産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ、社会に積極的に寄与し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養う。